

「私たちの心より大きな方」

I ヨハネ 3 : 17~20

I ヨハネから教えられています。前回の箇所では、キリスト者の愛する事の基準というようなことについて教えられました。

その基準は、キリストの愛であり、キリストの愛は、たとえば、「友のために命を捨てること」であり、いやたとい敵であっても、その隣人を愛し、命を与える事であると教えられました。ですから、ヨハネは、ヨハネの教会の人たちにこのように教えます。

「3:16 キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちが兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」

その愛の大きさというのは、あるいは、パワーというのは、ものすごく大きいものであります。前回、イエス様は、ゲラサ人の地の墓場に暮らしている男の癒やしについても触れました。イエス様は、彼を愛し、彼から悪霊を追い出すために、2000匹の豚に、その悪霊を宿らせて追いだした箇所も見ました。



これも、ある意味で、世の中からのけ者にされ、無きに等しい存在であるひとりの異邦人のために、これほどのことをされたということを思うとき、当時、ゲラ人の地にいた人たちも、その愛に驚きましたが、いわばその愛のなし得た、そのパワーに驚いたと言えると思います。

今日の箇所ですが、このような言葉があります。

「3:18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」

この言葉です。特に、愛することにおいて、「行いと真実」をもって愛しましょうと言うことです。注目していただきたいのは、この「行い」と、「真実」の言葉のセットです。

パウロは、I コリント人への手紙 13 章の愛の章といわれるところで、「13:4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。13:5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、13:6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。」

愛を定義して、4 節の寛容さや親切はわかります。しかし、「ねたまない」から始まり、6 節では、「不正を喜ばずに真理を喜びます」と言いまして、まことの愛には、「真実」さが伴っていないなければならないこと、あるいは、「不正を喜ばずに」と言い、罪の無いこと、すなわち「聖さ」が伴っていないと話すのです。

これは言い換えると、神の「義と愛」の問題となります。この二つは一見、両立しないように思えるからです。愛は、どちらかというところ、寛容さをイメージします。ゆるす心です。しかし、義というときには、寛容さより、正しさをイメージします。いふならば「ゆるさない心」です。このくらいならいいだろうという妥協を許さないのです。いっけん矛盾するようですが、神には、この二つの性質は矛盾することなく存在しているというのです。それが、神の愛と義の問題です。



少し、聖書から離れるかも知れませんが・・・私はこの問題を考えるとき、こういう事を考えます。話題のアメリカメジャーリーグの野球選手ですね。今年も MVP(最優秀選手賞)をとるのでしょうか。ピッチャーでありバッターでもある彼は、今年はバッターしか出来ませんでした。バッターに集中して、大いに活躍しました。今年からはじめたことがあるそうです。それは、ベースからの自分の立ち位置を正確に決めるために、バットを、ベースにおいて、自分の立ち位置を定める作業です。バッターボックスは、白線を引くときに不正確だそうです。それで、バットに正確にボールを当てるために、正確に立つ必要があるというわけです。彼はパワーのある選手ですが、それと同時に、正確さが大事だとい

です。ストライクコースをコントロールする、あるいは、見極めることが大事だとも言います。
あるボクシングの選手がこう言っています。「精度はパワーに勝り、タイミングはスピードを凌駕する。」
(by コナー・マクレガー：ボクシング選手)

パワーもスピードも大事だが、それ以上に正確さや、また正確なタイミングが大切だということです。
私は、クリスチャンにも同じようなことがいえるのだろうなと思うのです。愛と聖さの両方が備わっていないと、クリスチャンとして事をなし得ないと言うことです。神さまが愛と義の方であるように、クリスチャンが、愛と聖さの両方がバランス良く備わっていないと、神の業はなし得ないと言うことです。

今日の箇所を、もう一度ふり返ります。

ヨハネは、前回教えられたように、命という、かけがいのない、一つしかないリスクを冒しても、というより、すべて、ささげて尽くすこと、これが、クリスチャンの愛であるべきだと教えられました。すなわち、イエス様が、罪人の為に命を捨ててくださった、その愛にならうべきだと言う事です。それは、ある意味で、愛の大きさでした。巨大なエネルギーと全力を伴う愛でした。

今日の箇所に入ると、いささか違ったヨハネの言い方になってきます。

最初の聖句を読みます。

「3:17 この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。」

「この世の財を持ちながら」この言葉は特別に金持ちという意味ではありません。多少の余裕という程の意味です。この言葉を解説する一つの本を読んでいたのですが、その本の著者は、この言葉でいう、富、あるいは多少なりとも余裕というのは、あなたが手にもって読んでいるこの本(私が書いた本)を買うことが出来る位の余裕だと言います。

つい 16 節までは、愛の大きさがキリストレベルで、ものすごいエネルギーの愛を説いてきたかと思ったら、いきなり、ヨハネは、「兄弟が困っているのを見たら、心を閉ざさないで、あわれみの心を閉ざさず、かわいそうだと思いなさい」というのです。正直言うと、ずいぶん、消極的な愛の言い方です。せめて、最低限の愛を持ってないですか？と問うているのですが、その言い方は、ここまでの、キリストの愛のレベルからすると、積極的な愛より、むしろ消極的な愛であって、本一冊分の施しをするほどの愛のことを言っているのだと言うのですが、そういう言い方です。

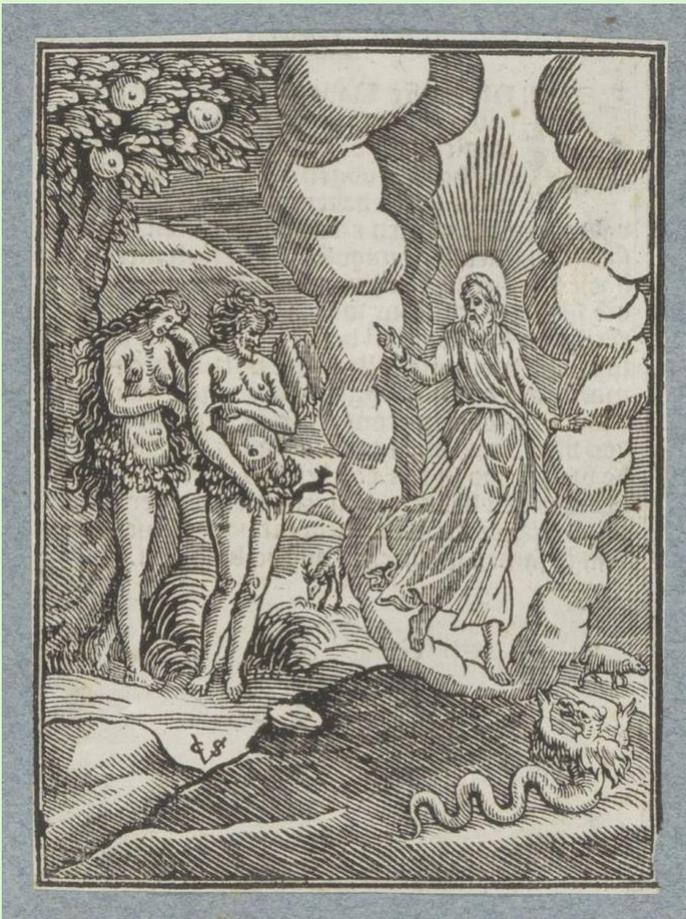
そして、先ほど言及した箇所ですが、「3:18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」と言いまして、真実をもって愛するということを言うのです。

嘘偽りのない、心からなる真実さ、いわば、パウロの言う「聖なる愛」をもって愛すると言うことです。ヨハネは続けてこう言います。

「3:19 そうすることによって、私たちは自分が**真理**に属していることを知り、神の御前に心**安らか**でいられます。3:20 たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。」

愛における「行いと真実」と 18 節で言いましたが、19 節以降で取り上げられているのは、特に、この「真実」という面で、そこが強調されているのがわかります。

「たとえ自分の心が責めたとしても、**安らか**」というのは、良心がせめないということでしょうか(ちがいますが)・・・嘘偽りのない真実なことを行っている時の、心のシャローム、平安を言っています。



これは、聖さという意味に置き換えても同じです。良心が責めないと言いまして、違いますが・・・と言い換えました。たしかに、聖さと良心とは違います。少し、難しくなるかもしれませんが、アダムとイブが、罪を犯して、隠れていたとき、神さまがどこにいるか？と問われて、裸であったのを恥じて、前(はだか)を隠して、神の前に出てきました。聖書的には、この、裸を隠す心(葉っぱで局部を隠す・・・)、これを「良心」と呼ぶことがあります。聖さは、むしろ、裸であっても、神の前に堂々と出られる聖さであります。

もちろん、聖書は、基本的に良心ではなく、聖さに生きる事を勧めます。

しかし、罪人である人間にとって、良心は、大きな間違いをしないために、ブレーキになってくれます。しかし、ブレーキではあっても、エネルギーとはなりません。ブレーキを踏み続けても、車は前に進みません。悪いことは起きません。間違っって人を轢(ひ)いてしまうことは、決してありません。止まっているのですから。しかし、止まっているので、前には進みません。事は何もなさないのです。良心とはそういうものです。

聖書がクリスチャンに求めるのは、良く読むと、こうあります。「3:20 たとえ自分の心が責めたとしても、**安らか**でいられます。」

ここで言えば、自分の心が責めるのが良心のはたらき、安らか(シャローム)が、クリスチャンのもつべき聖さです。良心の責めがない状態を、ヨハネは示しています。聖さは、最初に、野球の例であげましたし、ボクシングの例でもそうであるように、むしろ、力を生むのです。また、「神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。」とヨハネが言うことによって、この「安らか」さが、神の御霊による平安(シャローム)によって、上から与え

られる事を保証していると言っているようです。

クリスチャンが、神の前に聖くあるとき、それが、たとえ、消極的に思えるような、小さな愛でも、大きな影響力を人に与え、大きな事がなし得る力となるのです。「自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざさない」というような消極的な言い方にしかならないような、愛であっても、その真実な聖い愛の心は、大きな影響をその人にあたえ、また神さまに応えていただける愛となるのではないのでしょうか。

「3:18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」

その言い方は、一見、「一日一善(いちにちに一つはいいことをしましょう)」と、まるでポスターの標語のような言葉です。けれど、この週、あの人のために心から祈り、聖さを伴う、心からの同情と愛をもって語る一言が、兄弟を心から励まし立たす、そんな一言と、一善、ひとつの行動が出来るように、主に祈る歩むこの週でありたいと願います。